

森本治吉博士の批判に回答する

塚原 鉄雄

大学は、研究機関であるとともに、教育機関であります。そして、大学教員には、三種の仕事があります。第一に学問研究、第二に学生教育、そして、第三に学内行政、——この三つは、大学教員の義務であり、また、権利でもあります。そして、大学に付属する研究機関に勤務するのではない限り、この三つの責務は、大学教員を成立させる鼎の脚に比定しなければなりません。

勿論、個人には、特性もあれば、特技もあります。個人としての大学教員が、三つの責務について、その全部を、完全に充足することは、恐らく難事でありましょう。事実、わたしどもの周囲に、そんな人物は稀有でありまして、その中の二つだけでも、完全だといえる人物も、また、見当たりにくいのであります。しかし、そういった現状であっても、基本的にいえば、この三脚に、軽重はないはずであります。

いま、学校行政のことは、考慮しないことにします。軽視してよいというわけではありません。批判の範囲が、研究と教育との関連に限定されるからであります。

さて、教育ということからしますと、学校の教員は、その

全体が教育者であります。しかし、大学教員が教育者であるということとは、高等学校、中学校、小学校、そのほか各種の教育機関の教員が教育者であるのと、決定的に相違いたしません。それは、大学教員というものは、学問研究の専従者であることにおいて教育者である、ということでありませぬ。教育者であることにおいて研究者であるものではありません。大学以外の教員が、その職務に関連して、研究するのは、教育者であることにおいて研究者である、ということになります。しかし、大学の教育、大学教員が教育者であることは、むしろ、その逆だということになります。

とすれば、大学教員は、研究だけをやっておればよい。研究の過程なり結果なりを、学生に伝達すれば、教育者としての大学教員の責務は、完全に遂行される。……そういった議論の妥当性も、そこから成立します。

事実、旧制帝国大学の教員は、大休、そういったものでした。そして、旧制帝国大学の出身者、または、旧制帝国大学の出身者の指導を、直接にせよ間接にせよ、受けて来られた人びとは、そのような見解に傾斜しがちであります。それで、十分成果を示して来たことも、否定できません。

しかしながら、現代では、事情が変動しております。大学教員の研究が、そのまま講義の材料になるでしょうか。学生たちは、忽ちに消化不良になります。大学院のことが言及されましたが、大学院でも、程度の相違はありますけれども、

やはり、同じことであります。わたしも、大阪市立大学で、大学院の講義を担当しております。ここでは、門戸が、学外出身者にも開放されておりますが、国語学もしくは国文学を専門とする者として、当然に心得ているはずの常識に、重大な缺陷のあることを発見します。かれらは、職人的専門家として、大学院の入学試験に合格していますが、学究的専門家の卵とはいえない人間が、その大部分なのです。

新制大学では、大学教員が、研究者であることによつて教育者であることを、簡単には実現しえない、———そういった状態になっております。教員と学生との間に、断層があつて、それが、難事となつております。

ですから、大学教員は、研究者であることと、教育者であることを、結合しなければなりません。旧制にあつて、それは、自動的に実現しました。けれども、現下の情勢では、実現させようとする意欲と方法とがなければ、不可能なのです。

そんなことは、大学教員の関知するところではない。学生がついて来られないのは、学生に責任があるのだ。———そういう意見も、有力であります。そして、また、わたしも、究極的には、こういった意見に賛成します。

けれども、新制大学の学生に、当初から、それを期待し、それを要求することは出来ません。漁師に、名人の庖丁を期待するようなものでしょう。事実が、もっとも雄弁に、これ

を証明します。そういうところでは、僅少の秀才だけが、わずかに、その関門を突破しますが、大部分は、脱落してしまいます。馬鹿や怠惰な人間が脱落するのは、大学の性質上、仕方がないでしょう。しかし、可塑性を豊富に具有しながら、それを発揮する方途が見つからないで、朽ちはてしてしまう例が、あまりにも、多いのではないのでしょうか。

大学の任務は、学者を育成するばかりではありませんから、量的にいつて、学問に関係のない卒業生が、多数であることは、むしろ、いいことかも知れません。しかし、大学の門にはいった以上は、せめて、学問の香を嗅ぎ、学問の味を知つた後に、自分の判断で、学問を離れたのであつてほしいと思ひます。でなければ、大学の意味がありません。しかるに、現状は、学問の香も味も、全く触れることなく卒業してしまいます。教員の講義は、僧侶の読経のようなもので、深遠かもわからないけれども、チンプンカンプン、学生には縁のないものとなります。

大学教員からすれば、自己満足でしかありません。その職責を、遂行していかないことになります。

学問研究というものは、研究学徒の自己満足であつては、ならないと思ひます。最少限の要求として、その成果を、学生に譲渡する義務があります。そのために、その研究を、教員だけの独占物としないで、学生との共有物とする必要があります。

学生の教養を認識し、その対策を探索することは、大学教員にとって、その研究を、学生との共有物とするために、適切な方法を模索する営為であります。研究所に勤務する研究者でなく、講義を義務づけられている研究者には、必要かつ当然の模索と申せましょう。

現代の学生が、それを必要とするならば、大学教員は、その責務を遂行するために、真剣に討議し、打開しなければならぬ、重要な課題であると考えます。このことは、高等学校そのほかで究明されなければならない、いわゆる国語科教育の問題とは、その性質を、根柢的に異にします。また、学問の啓蒙的な普及とも、混同してはなりません。大学に教員として勤務する人間が、学問研究の実践に表裏をなして、検討し、考慮し、実践しなければならぬ、学の実践に連繫する問題であります。

少なくとも、わたしは、そういう見解で行動し、そういう観点から発表したつもりであります。もし、「教え方」の発表であると理解されたのでありますら、それは、わたしの話し方が拙劣なためであります。申すまでもなく、わたしの真意ではありません。ですから、わたしは、事例にも、わたし自身が教室で言及したものに限定し、しかも、従来の専門家に、盲点があったために、学生に理解しにくいだけではない、研究にも疑問のあるものを、選定したのであります。

なお、若干、補足しますと、源氏物語の薰蕙べて、季節が

春であること、時刻が夕暮であることにも、重要な意味があります。そうした限定が、嗅覚印象に関与して影響するところは、少なくとものであります。本文の解釈を意図する発表ではありませんので、省略しました。

そういうわけでありまして、学術研究の団体が、こういったことをも、討議の対象とすることは、その本質を逸脱する行為と考えません。のみならず、必要であると思えます。むしろ、こういった問題を、看過していたところに、学問が、独善的になり、職人的な詮索だけが学問であるような錯覚の袋小路から、脱出できなくなってしまう原因があるのではないのでしょうか。

旧師でいらっしやる森本先生のご批判に、大変に失礼な回答となりまして、恐縮いたします。しかし、自己の見解を、だれに対しても率直に披瀝する態度は、二十数年の昔、二年有半の講筵で、先生の、範としてお示しになったことであります。その思想についてはともかく、その態度については、ご諒恕いただけるものと、蕪辭を陳ねて、卑見を申し上げます。

(一九六四・一一・六追書)